1 趣旨説明
「行動する人の歴史」とは

企画研究「行動する人の歴史」代表
松方 冬子（東京大学史料編纂所 教授）

本日は多くの方々にお集まりいただき、有難うございます。今日のオープンセミナー「語る力が権力を作る？―歴史からの問い―」は、東京大学ヒューマニティーズセンター企画研究「行動する人の歴史」の一環として開催しました。導入として、本企画研究の趣旨を文章でご説明します[1]。

これからの歴史学への一つの提案

我々が生きている世界は、これからどうなるのかサッパリわからない。自分一人の将来を考えても、どうなるのか、どうしたらよいのかわからない。未曽有の出来事が次々に起こる。そんな時代でも、そんな時代だからこそ、先人がどうやって生きてきたのか、危機を乗り越えてきたのか、変化に対応してきたのか、という情報は、とても大切なことだろうと思う。これから人類が生きていくために参考にできる実体験は、今まで人類が生きてきた歴史でしかない。

我々の企画研究「行動する人の歴史」は、そんなところから出発する。「機会主義的であること」が批判されたりもするが、個々の人間が次の一歩を踏み出す時にまわりの状況を見て自分にとって最善のことをするのが、そんなに悪いわけでもないだろう[2]。今までのグランド・ナラティブ（「日本はこうやって豊かになっ

1 セミナーでは時間の制約から一部を割愛したが、本冊子では原文をすべて掲載した。

2 正直に言えば、誰かが示した「長期的な展望」を「世界史の一般法則」とか呼んで、「どうせそうなる」と考えることには反対である。「どうせそうなる」と思っているからこそ「自分は何をしても良い」と考えがちである。しかし、世界の動きは一人一人の動きの総体なのであるから、「どうせ」（＝自分が何をしたとしても）ということはあり得ないと思う。我々は、「社会」という広場（アゴラ、別の言い方をするならば個々人にとっての「居場所」）があって、「民主主義」というルールがある「はずである」「べきである」という議論に慣らされているが、本当にそうなのか、もしそうでなかったなら、どうやって「社会」と「民主主義」を作れるのか、は教わってこなかったように思う（拙稿松方冬子「普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー」1～4〈『UP』568～571号、2020年〉）。もちろん、広場を作るには個人の行動を制限するための力が必要であるが、その力を作るのは個々人なのではないだろうか。どうすれば、そういう力を作ることができるのだろうか。数十年前「英雄待望史観ではだめだよ」と老先生方に教わったのに、今「英雄待望史観」に陥っているようにしか見えない。世の大多数が、自分は「今だけ、金だけ、俺だけ」で、どこかの誰かが良い世の中を作ってくれることを待っているのでは、結局世の中は良くならないだろう。競争社会においては、「栄者自安々　辱者定碌々」（勝ち組はシステムが抱える問題に気づかない、負け組は問題を解決する力がない）（羅貫中、小川環樹、金田純一郎訳『三国志』〈岩波文庫、1988年〉）。負け組が声を上げて、勝ち組がそれに答えるしかない。

てきた」というような「大きな語り」）が通用しなくなってきたのなら、まったく新しい歴史の語りを作ればよい。そこで、本企画研究では、「枠組み」を諦め、あえてバラバラの個人から始める。

それでも、今まで人類が生きてきた歴史にはある一定の限界があって、だからこそ、まったく見たこともない世界を描くファンタジーやＳＦの文学作品、マンガ、映画、アニメなどが人々に理解され、多くの国の言葉に翻訳されて受容されているのだろう。人類が持っている手札は、実はそんなに多くないのかもしれない。

その手札はどこにあるのだろうか？　どうすれば探り当てられるのだろうか？歴史学が持っている材料は、「史料」と言う。主に過去に書かれた文献である。けれども、文献資料以外にも、考古資料、文学作品、絵画、写真、そういったものを歴史学のために使おうという動きはずっと前からある。実際に歴史の現場に居合わせた人々からインタビューをして聞き取り調査をするオーラル・ヒストリーと呼ばれるものも、かなり前からある。しかし、ここで私が言いたいのは、文献資料以外の史料を使いましょう、という史料論ではない。歴史を「人間の経験の総体」と定義するならば、なにも「歴史の現場」は文献に書かれたものに限らず、歴史学者によって「史料」として「発見」された、考古資料、文学作品、絵画、写真、そういったものに限らず、今ここに生きているすべての人の経験がその一部となる。誰しもが、自分の経験、人から聞いた話、新聞やテレビや小説から得た知識、そういうものを踏まえて、次の行動を決めているのではないだろうか。したがって、この考えを推し進めていくならば、その活動は自然と狭い意味の「歴史学」を超え、学問分野を超え、アカデミアの枠もはみ出ていくだろう。

しかし当面は、企画研究の枠組みに従い、狭い意味での歴史学の専門家を中心に、今後広げていくための足場を作る試みをしてみることにした。もちろん、将来的にはそういった枠組みを離れて、自律的に広がっていくことを企図している。私だけ、あるいは企画研究に参加している我々だけが受益者となるのではなく、今後の担い手一人一人にメリットがある「自律分散システム」としての新しい学問となってくれることを祈る。（だからといって、私が犠牲になるつもりはない。最初のアイディアを出した人間に多くを期待しすぎ、犠牲にしようとする―犠牲にするしかないと発想する―ことは、次のアイディアの芽を摘んでしまうことになる。どんなアイディアも万全ではなく、必ず賞味期限の終わりが来る。そのとき、また新しい知恵を出すためには、出してもらうためには、犠牲を出してはいけない。）

動詞をキーにする

「行動する人の歴史」というタイトルは、赤ちゃん、病人、老人など、思うように行動できない人を排除すると言われるかもしれない。けれども、目の前で委縮して、動けずにいるように見える人間たちに、元気を出して一歩を踏み出してもらうために、あえて「行動する人の歴史」というタイトルをつけてみた。あとで述べるように、赤ちゃんや病人や老人を排除するつもりはまったくない。これからの歴史を作っていくのは、AIでもロボットでもなく、やはり行動する人々だろうと信じている。

歴史を書くのに、「東京大学の歴史」とか「日本の歴史」とかではなく、「〇〇する人の歴史」と動詞に着目する理由は、一つには、史料のあるところとないところという大きな格差を乗り越えるためである。ヨーロッパ、とくにイタリアには古い史料がたくさんある。だからといって、「イタリアはすごいんです」と言ってしまうと、他の地域との連帯感は生まれない。日本も世界の中で例外的に史料が多く残されている国であって、それはそれで素晴らしいことだけれども、それを誇っているだけではどうにもならない。ヨーロッパとその周辺が世界を支配した19世紀型の秩序が大きく崩れ、北米合衆国の住人を中心にアジアやアフリカなど史料を持たない人たちが力をつけてきたのが21世紀の世界である。彼らをバカにしているようでは、「歴史学なんていらない」と言われてもしかたがない。ましてや、「史料にそう書いてあるから、黒人は（売買される）モノだった」などと言ったら、史料が燃やされてしまう危険さえある。史料は、どれほど貴重であったとしても、万能ではない。

古い史料がなくても、20世紀、21世紀には何らかの経験の痕跡があり、何よりもそこに生きている人たちがいる地域であれば、古い史料が残っている地域と同じように扱えるようにする方法として、「行動する人の歴史」を考えた。古来人間は、いろいろなことをして生きてきた。歩く、眠る、食べる、学ぶなどは、古今東西に共通する行動だろう。ググる、スワイプ（する）、タップ（する）のように、現代人にしか経験しないこと（ちなみに私は後２者がいまだにうまくできない）もあるが、それでも時空を超えた人たちを結び付けて考え、共通点を見ていくのには良いのではないか。これによって、今まで歴史学を縛ってきた縦軸、横軸から自由になることができる。

この年表（図１）は、よく見られる歴史の説明の一つの形です。著者の羽田正先生を批判する意図はまったく無く、非常に象徴的な例として挙げているだけです。横軸に空間があり、縦軸に時系列があって、その組み合わせで世界を見ていくという歴史の語り方です。

さらにわかりやすいのは、ごく最近出版が開始された『岩波講座　世界歴史』(2021年10月～）のパンフレットに載っていた図（図２）です。

そして、こうした語り方の対照となりうる語り方として描いてみたのが次ページの図３です。真ん中に「2021年の東京」とあります。今日、2021年7月9日の東京（オンライン開催なので地方から参加されている方もいらっしゃるかもしれませんが）を中心として、左上にある19世紀の日本の話をこれから水野博太さんがしてくださり、その次に20世紀のイギリスの話を後藤春美

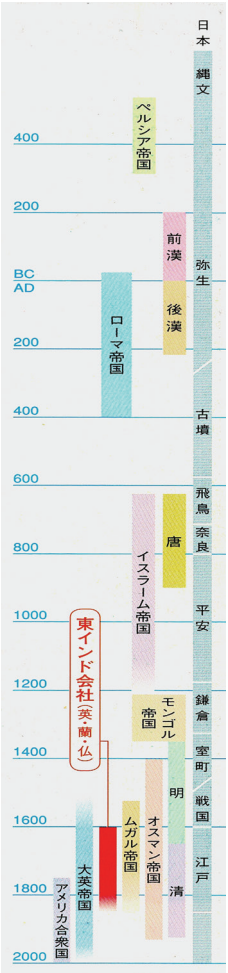

図１　羽田正
『興亡の世界史 15
東インド会社とアジアの海』
〈講談社、2007 年〉

『岩波講座 世界歴史』全体構成図

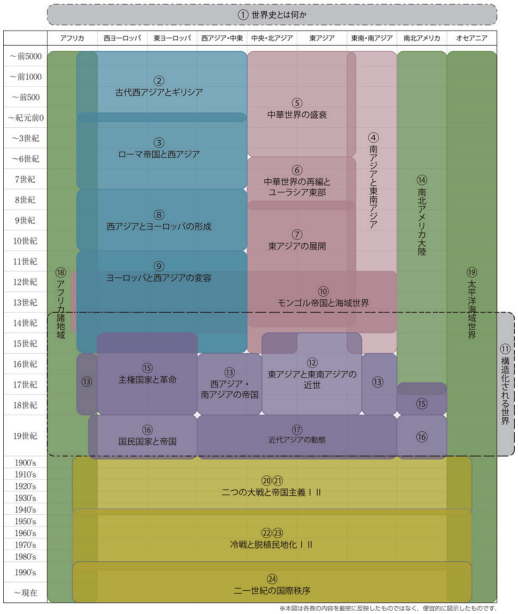

図２　『岩波講座　世界歴史』
全体構成図

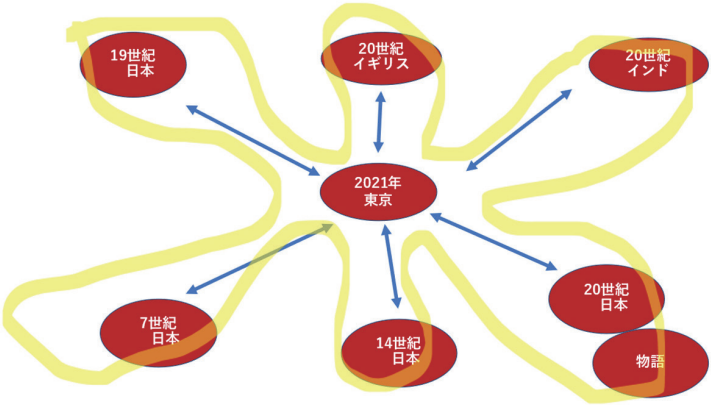

図３

さんが、そして20世紀のインドの話を井坂理穂さんが話してくださいます。

ほかに共同研究の仲間として、７世紀～８世紀の日本を対象としていらっしゃる稲田奈津子さん、14～15世紀日本の三枝暁子さん、20世紀の日本を物語世界との関係で見ていらっしゃる永井久美子さんがいますが、歴史家は誰でもこの図のように、自分が今いる場所や時と研究対象を対話させながら研究していると思うのです。

このように考えれば、どんな専門の人であっても、「今、ここ」を共有している限り、対話は成り立つはずだろう。必ずしも、（図１）（図２）のように時間と空間を縦軸、横軸にとった世界の中で、マトリックスの中で自分を理解するという形でなくても、自分を中心にした世界を考えられるのではないか。

さらにはプロの歴史家である必要もなく、学生さんであっても、あるいは今日は一般公開セミナーですので、会社にお勤めの方やお店をやっていらっしゃる方など様々な方がいらっしゃると思いますが、どんな方でも、今日、この場に参加されている方は「2021年の東京」に生きているという点で対等であり、歴史的な知識がとくになくても、今日の話のかなりの部分に参加できるはずだと私は思っています。実体験が必要な部分、あるいは哲学的な思考が必要な部分も多くあります。

ただ、こうしたことはまだ本当に考え始めたばかりであり、「これが正しい」と思っているわけではまったくないので、ぜひとも後で議論に参加していただけたらと思っています。

19世紀言語という縛り

行動に着目するもう一つの理由は、我々の思考の枠組みを縛ってきた「19世紀言語」から自由になることである。「国家」「社会」「外交」「経済」といった19世紀ヨーロッパに起源をもつ言葉は、翻訳されてなんとなくわかった気にはなるけれども、突き詰めてわかっているのかと聞かれると心もとない。さらに、例えば、「society」という英語と、「社会」という日本語は、まったく同じかというとそんなことはない。(「社会」は小学校の科目の名前でもあるが、societyはそうではない。)そのため、日本語の「19世紀言語」で考えた結果を、国際的に発信することは非常に難しい。その点、走る、質問する、分け合う、といった動詞は、もう少しわかりやすく、国境も超えやすいのではないだろうか。話したり書いたりしてわからなければ、身振り手振りとか、絵に描くとか、もう少し説明の可能性も広がるような気がする。

さらに、「行動する人の歴史」は、古今東西の過去(昨日も含む)を素材とするため、従来の歴史学の枠にとらわれない、多分野の協業が可能である。日本史、東洋史、西洋史の枠はもちろん、歴史学と文学、社会心理学、思想史等々との垣根も越えられるだろう。さらに、アカデミアとノン・アカデミアの枠も超えられるように設計したつもりである。発表形態も、従来の学術書や論文集、セミナーなどだけでなく、簡単なところでは**パワーポイント**を利用した音声吹込みスライドショー、遠いところではアニメのオンライン配信など、新時代の歴史学のために幅広いチャレンジを可能にすることが、本企画研究の目的である。

人はどうやって「偉く」なるのか

使えそうな動詞はいくらでもあるのだが、ここは、歴史学が今まで得意としてきた(権)力論に関わるものから始めたいと思う。

拙編『国書がむすぶ外交』(東京大学出版会、2019年)では、「ふつうの人々」に対する「偉い人たち」という言葉を用い、「偉い人たち」をつなぐ「またがって活動する人々」を考えた。

この「ふつうの人々」とはいわゆる「民衆」[3]であり、「偉い人たち」とはいわゆる国家や支配者層であり、「またがって活動する人々」とは、国際的な商人や国際的に活動する宗教者である。見慣れない言い回しだが、あえて和語で考えようという試みであった。

ここでいう「偉い人たち」「ふつうの人々」は、あえてきちんと定義していない。両者の違いは、身分や階級ではない。むしろ、誰の中にも、「ふつうの人」の側面と「偉い人」の側面があり、相手によって、場面によって、使い分けていく、というイメージである。

ここでは、「偉い人たち」はどういう人たちか？なぜ偉いのか？を考えていく。いわば、権力の生成メカニズムの解明である。（「偉い」は、倫理的に優れているとか、価値があるとかいう意味ではなく、「影響力がある」「権力がある」という意味で使っている。ただし、かならずしもネガティブな意味ではなく、ニュートラルである。）

地球上のほぼすべての人は、最初の約10カ月を母の胎内で過ごす。胎児が語ることはできないので何とも言えないが、それでも、自ら食べずとも栄養が与えられ、物理的に守られ、気持ち的にも安穏な10カ月なのだろうと考えられている。長じて、欲しいものは自ら作り、自分の身は自分で守り、褒められなくても頑張れるようになってなお、人は、与えられ、守られ、癒されることをどこかで望んでいる。逆に言えば、多くの人が、誰かに何かを（貸し）与え、誰かを守り、誰かを癒すことが可能である[4]。

けれども、誰かに何かを与える（誰かを守る、誰かを癒す）ことは、多くの場合、なんらかの対価を要求する。「守ってやる代わりに癒してほしい」「与える代わりに守ってほしい」というのは、ある意味で正当な要求でもあって、否定しにくい。対価を求めることを忌避する向きもあるかもしれないが、対価を支払わないことは、人間としての尊厳や自由を犠牲にしていることだったりもするので、要注意である。このあたりの概念操作の隘路に迷い込むことは、広い意味での癒す（語る）人々の術中にはまることでもあるのでここでやめにしよう。

3　私は、「民衆」という言葉が好きではない。人間に向かって、「民」と言い、（私の意見では、一種の差別用語である。同じように、「庶民」も、差別用語である。）あまつさえ、いきなり「衆」をつけて集合名詞で呼ぶのは、失礼なのではないだろうか。私自身を含めた一人一人を、自分の頭で考え、自分の足で歩む、独立自尊の人間として扱ってしかるべきなのではないかと思う。このように書くと、「自分のことさえ考えればよいというのか！」と叱られるかもしれないが、「独立自尊の人間なら自分のことしか考えないはずである」という憶測は、いったいどこから来るのだろうか。「人文学のアカデミア世界」に限らず、いやしくも人間ともあろうものが「できない子キャラ」「貧しい子キャラ」を演じることには賛成できない。結局は、無責任を容認するだけのような気がする。したがって、私の言葉の使い方では「ふつうの人」と「偉い人」「またがって活動する人」をまず考えて、それを複数形にしようとしている。

4　私はここで、「母親」を美化するつもりはない。逆に言えば、最も恐ろしいものが母親である。

ともかく、言いたいことは、私は力（権力）を必ずしも悪だとは思わないし、誰かが権力で自分は違う、とは思わない、ということである。力（権力）は使い方が大切なのであって、自分の持っている力をなるべく良い方向に使いたいと思う。私がかつて学んだ歴史学は、誰か＝権力＝悪という感覚をつねに身にまとっていて、それがまた、歴史学への不信感の元ともなったような気がする。そういう歴史学が悪だとは思わないが、ここでは別の見方を考えてみたい。

「偉い人たち」の3種類

もう少し難しい言い方を使うならば、「与える人」は経済権力、「守る人」は軍事権力、「癒す人」は、宗教･学術権力と呼ぶことができるだろう。私の考えでは、とくに近代の「世俗化」以降、「科学」が一種の新興宗教のような位置を占めているので、広い意味で、宗教と学術を一緒にしても良いのではないかと考える。あまりにも生々しいのもどうかと思うので、昔の例で考えてみよう。

17世紀で考えてみると、私が経済権力として思い浮かべるのはオランダ共和国、軍事権力として思い浮かべるのは徳川政権、宗教・学術権力として思い浮かべるのはヴァチカン教皇庁（教会国家）である。

権力と言えば、ふつう国家を思い浮かべるし、オランダ共和国も徳川政権（幕藩制国家）も、教会国家も「国家」と呼ばれる。けれども、実は、一口に言う「国家」には、複数の種類があるのではないだろうか。

たとえば、気に入らない宗教を抑圧しようとする場合、経済権力なら、その宗教の信者の税金を３倍にするだろうし、軍事権力なら踏み絵を踏ませ、宗教・学術権力なら異端審問を行うだろう。それぞれ似通っている時もあるけれども、たとえば、カルロ･ギンズブルグ『チーズとうじ虫―― 16世紀の一粉挽屋の世界像』（みすず書房、1976年）という本が可能だったのは、ちょっと変な思想を持っている粉挽きの異端審問を担当した神父が、あれやこれやと質問をして、彼の考え方を聞き出したことによる。こういうことをするには、話す、聞く、理解するなどの技能が必要で、絵踏みという甚だ外面的な行動強制を主たる手段にすることしかできなかった徳川政権とは大きな違いである（徳川政権も仏教僧に説教をさせるなどはしているが）。

もっと身近なところで、研究グループを動かそうとするなら、サイフ（研究費）を握るという経済権力的な方式のほかに、メンバーの前で論敵を非難して見せる（言外に、敵に回すと怖いぞという）、自分以外の大先生を崇めてみせる（自分は祭司長の立場に立つ）などの軍事権力的、宗教権力的な方式もあるだろう。（個人的には、どれもなるべくやりたくないとは思っているが、最初に言ったように、

権力は必ずしも悪ではない。）

ただし、どの権力でも単独では長続きできない。そのため、長続きするにはほかの種類の権力を動員する必要がある。相互の組み合わせの方法や棲み分けの様子にはさまざまあると考えられる。

オランダ共和国は、ホラント州の有力都市エリート（レヘント：支配者と呼ばれる）が中核となって形成している。彼らの代表が構成する連邦議会（スターテン・ヘネラール）（惣国衆）が、最高意思決定機関である。ライン川・マース川という大河の水運と北海、バルト海、大西洋、さらにはインド洋、シナ海にまで延びる海運とそれによる商業を基盤とする経済権力である。しかし、連邦議会が、徴税や宣戦布告、講和条約締結の権を握っているとはいえ、オラニエ家（現・王家）を排除できなかったのは、いざというとき傭兵を率いて戦う人間が必要だったからだろう（連邦議会の構成員たちは商人であって、戦争に行くなどという馬鹿なことはしない。）もちろん、共和国と改革派教会（プロテスタント）との結びつきは切っても切れない。最初の資本主義は、プロテスタントの教義が支えていたのである。

徳川政権（公儀権力）は、ほぼ純粋な軍事権力だと言ってよいと思うが、京・堺（のち大坂）、博多（のち長崎）、江戸の商人たちの経済力がなければ、その軍隊も戦闘行為も維持することができなかった。また、キリスト教や日蓮宗不受不施派を弾圧したということは、それ以外の宗派を保護し、かわりに支えられたということでもある。

本体はほぼ純粋な宗教権力であるヴァチカン教皇庁も、前近代には領土を支配しており、金融機能を持っていたと考えられる。必要があれば、教皇庶子が傭兵を率いて戦争もした。

人の歴史を考えるならば、なにか「国家」という同じ規格のものが、世界のあちこちで誕生して、地表面や人間たちを分けあうという図式は理解しにくい。むしろ、与える力、守る力、癒す力を持つ人たちが核になって人々を束ね、それらの集団が他の力を借りて相互に補完しあうことにより、だんだん単一の規格ができあがってきた、と考えるほうが自然だろう。今でも、アメリカ合衆国とヴァチカン市国はともに対等な「主権国家」だということになってはいるが、両者の国家権力が持っている力は相当異質である。

私がこのように考えるに至ったのは、今まで学んできた日本史学の中に、そのヒントがあったからである。「日本史の蓄積を利用して世界をみる」というのは、たとえば三谷博『日本史のなかの「普遍」』（東京大学出版会、2020年）などがあるが、まだまだ可能性は大きいように思われる。

たとえば、近世史家吉田伸之によって提起された「都市の分節構造」という考

え方があるが、それによると江戸には、藩邸社会、寺院社会、市場社会、大店社会があり、それらの複合によって江戸という都市が成り立っているというものである。藩邸社会は大名江戸屋敷、寺院社会は浅草寺・寛永寺・増上寺などの寺社、市場社会は青物市場など、大店社会は三井越後屋などの大店がそれぞれ中心となり、出入り商人や出入りの宗教者などによって構成される。藩邸を軍事権力、寺院を宗教権力、市場・大店を経済権力と置き換えてみれば、世界のどこにでも通用する考え方のように思う。

また、日本中世史における権門体制論、東国国家論（あるいは２つの王権論）とも絡むことができる。権門体制論は黒田俊雄が唱えたもので、公家権門、宗教権門、武家権門が、それぞれ荘園を経済的基盤とし、対立点を抱えながらも相互補完的関係があったとするものである[5]。それに対して、佐藤進一の東国国家論は、鎌倉幕府を東国において朝廷から独立した独自の特質をもつ別個の中世国家と見なす考え方である。五味文彦による２つの王権論は、東国国家を東国の王権だとするものである。

ここでは、権門体制論か東国国家論（２つの王権論）のどちらが正しいかということは問わない。ただ、複数の異種の[6]権力が併存したり、相互補完関係にあったり、ということが確認できれば良いと思う。最近では、『中世に国家はあったか』[7]という本も出ていて、それぞれの「偉い人たち」の結集力によっては、「国家」といえるほどでもなかったということなのだろう。

では、それぞれの権力には、どのような特質があるかを考えてみよう。

与える人たち（経済権力）の歴史

まず、直感的に思いつくのは、ただ「与え」てくれるひとはほとんどいない、という事実である。かつ、与えるだけだと、実は権力にはならないのではないか。そこで「与える」を「貸し与える」としてみよう。これなら、権力として納得できる。

なお、「支配」という言葉は、中世には「配る」という意味だったものが、近世（江戸時代）には「一時的な上下関係」を指すものとなり、近代にほぼ今と同じ、「コントロール」という意味になる。もちろん、貸しても返してもらえなければ、与えたと同じになる。「貸す」ことが権力になりうるには、「契約」というものが実効性を持つような集団意識（これは宗教・学術権力の守備範囲でもある）、ある

5 黒田俊雄「中世の国家と天皇」『岩波講座日本歴史 中世２』（岩波書店、1963年）。
6 すべて荘園を経済的な基盤としていたので、それぞれの権門や国家には異質性だけでなく同質性も（異質性以上に）見いだせるのかもしれないが、ここでの行論には大きな支障はないと考える。
7 新田一郎『中世に国家はあったか』（山川出版社、日本史リブレット、2004年）。

いはもめごとになったときのための裁判制度、場合によっては強制執行する軍事力、といったものも付随する必要があるが、しかし、そもそも先立つものがなければ、与えることも貸すこともできない。

また、貸すということは、モノの供給の時間差を埋める行為でもある。秋には潤沢にあった作物が、一年たてば足りなくなる。そのとき、たくさん持っている人が持っていない人に貸し与え、秋になったら返してもらう。私の乏しい知識では、古代中国における売買はこのようにして始まったという。ふつう、商うというと、距離の差を埋めるもの（たとえば、食料生産が行われて豊富な田舎から、食料がない都会へ売りに行くなど）を思い浮かべるが、むしろそれは後から始まったものらしい。また、貨幣を介在させない「物々交換の時代」というものを、歴史的に特定の時代として析出することは困難と聞いている。そのように考えると、「与える人」は「商う人」であると考えても良いのではないかと思う。

経済権力における「徴税」は、もともと、借りたものの返済だと考えられる。古代日本の「出挙」とは、種もみを借りた農民が、秋の収穫で返済することをいうそうである。あるいは、「投資」に近いものもあるだろうと思われる。人間は、権力がなければ、自分で経済的利益を上げ、自分で身を守り、自分で心の平安を調達しなければならない。大金持ちであるなら、用心棒や宗教者･学者を「抱えて」いる人はいたけれども、それほど余裕がなければ、数人で一人を雇うことはあるだろう。その規模が大きくなったと考えれば、経済権力にも納得がいく。

経済権力の編成原理は、このように負担やリスクを分散するための「仲間を作る」ことにあると思う。オランダ共和国や京や堺の町衆など、多くの経済権力が比較的横並びの集団を形成する。（しかし、その集団があまり大きくならないことにも注意する必要がある。この集団は独占主体でもある。）

面白いのは、高リスク事業には別会社を作るという技を持っていることなのではないかと思う。オランダ共和国とオランダ東インド会社の関係は、どうにもこうにもわかりにくいが、このように考えれば、納得がいく。東インド会社の出資者たちは、ほぼ共和国のお偉いさんと重なる。２つの組織は、同じ場所にいる同じ人たちなのに、なぜ別組織なのか？　アジアとの貿易というハイリスク・ハイリターンな事業に手を出すなら、日常生活の維持でもある本体を損ねないようにするのが、当然ともいえるだろう。

それ以外にも、市場と大店は分ける必要があるのか、とか、組織編成の神髄とも思われる信頼を構築する（信じる）、だますという行為、あるいは、独特の文化の作り方かと思われる、隠す、秘密にするなどの行為についても考えてみてもよいかもしれない。のちに述べる軍事権力、宗教・学術権力がよく絵画に描か

れるのに対し、経済権力が描かれることは稀である。オランダ共和国の偉い人たちは、黒ずくめの衣装で外出し、富をひけらかすことはしなかった。オランダには、きらびやかな歴史建築はほとんどない。富はこっそり蓄えるものなのである。(逆に、文化的繁栄には経済的な裏付けが必要というのも、また事実なので、この辺りについては議論になるだろう。)

守る人たち(軍事権力)の歴史

守ることは権力になるが、それにはふつう武力、軍事力が必要である。なので、ここでいう「守る人たち」は、「戦う人たち」とほぼ同義でもある。

軍事権力による「徴税」は、ミカジメ料、保護料と言ってよいと思う。中世の瀬戸内海で物品輸送を「保護」した海賊たちや、ユーラシア大陸でソグド人らの交易を「保護」した遊牧民を思い浮かべれば、奪う人と守る人は往々にして同じ人たちである。したがって、「守る」は「脅す」の裏返しである。

日本近世において、徳川政権(武家政権、公儀権力)がたびたび乱世の記憶を想起させて強調するのも、「乱世だとこんなにひどいぞ。天下泰平にしてやっているのだから年貢を払え。」という意味だそうである[8]。学生のころ、同級生がやっているシンポジウムに行ったら、男子学生が「男は如何に恋人を守るべきか」を熱く語って倦むことを知らない様子であった。「男はどうして女を支配できるか」を論じているように見えたが、本人たちはそう思ってはいない様子であった。

戦う人たちの意思決定は迅速を旨とするので、組織は明確に上下になることが多い(そうでないと戦争に勝てない)。命令する、従う、という行為がそれを支える。

しかし、上意下達で解決できないほど地理的に離れている集団を統率するには分権も必要である。鎌倉幕府の六波羅探題、室町幕府の関東管領のように、空間的に担当範囲をわけた子組織が存在するのも、そう考えれば理解できる。オランダ東インド会社も、経営そのものは軍事活動とセットであることが多く、その部分はバタフィアの総督府がすべて握っており、オランダ本国の重役会と空間を分けているともいえる。

戦う人たちは、目立つのが好きである。「武家文化は町人文化」という説[9]もあるが、必ずしもそれだけではないと思う。江戸時代の武家文化のなかには、将軍の娘が尾張徳川家に嫁いだ際に持って行った初音の調度(源氏物語に取材した)など、公家文化の影響を色濃く受けている。また、武家独自の文化だと思われるものもあって、それが派手な陣羽織や旗指物などである。

8 高木昭作「乱世—太平の代の裏に潜むもの—」(『歴史学研究』574号、1987年)。
9 吉田伸之「江戸の普及」(『日本史研究』404号、1996年)。

癒す人たち・語る人たちの歴史（宗教・学術権力）

癒す人は、語る人でもあるだろうと思う。戦争には、おそらく完全な勝ちも負けもないのだが、「戦争に勝った」という語りが成功すれば、それは勝ち戦になる。「戦う」人たちが何かを「守った」と言い張っても、「語る人」には「単なる略奪だよ」「侵略だよ」と言ってその価値を下げることができる。負けた人にとっては、その語りが癒す力になるかもしれない。

褒めてほしい、認めてほしいという「承認要求」は、大人になっても非常に強く、食欲の次に大きく普遍的な欲望だと聞いたことがある。そのため、仮に経済的に恵まれなくても、腕っぷしが弱くても、価値を与えたり奪ったりする宗教・学術権力を侮ってはいけない。

「徴税」原理はお布施、お賽銭である。なので、あまり税率を上げることはできなそうである。思うに、一番税率を上げられるのが経済権力で、次が軍事権力、宗教・学術権力は大した税はとれそうにない。「納税者の権利として、国家財政の支出に気を配りましょう。」というのは、経済権力に親しんだ人たちの発想なのではないかと思うこともある。

逆に言えば、維持にもさほど費用が掛からないのかもしれない。経済権力には少しでも高率の運用が、軍事権力には少しでも高い軍事力が要求されるが、宗教・学術権力は「偉そうに見せる」ことが一番必要なので、そんなに元手はかからないかもしれない。費用が掛かりそうなこととしては、天文学の知識によって、月食を予測する、暦を作る、正確に南北軸・東西軸で宮殿を作るなどがある（江戸城やヴェルサイユ宮殿は地形を利用しているので四至から見て斜めだが、紫禁城やローマのサンピエトロ寺院はそれぞれ、南北・東西軸に拠っている。後者は宗教・学術権力的な要素が強いのだろう）。

組織編成では、ネットワーキング（＝ヨコの繋がり）が重視される一方、学統的なもの（＝タテの繋がりも無視）できない。最新の知識を入れるには、上下にこだわっていてはダメである。しかし、教え教わるという関係は上下になりやすく、しかも時を超えて強固である。

この人たちは、「文化」と非常に近いところにいる。いわゆる「文化」というのは、ほぼこの領域に属する。

語る人たち

本セミナーではとくに、「語る」に着目する。

世間では日本の「権力者の語りの力不足」が話題になっている。欧米等のリーダーたちが自分の言葉で民衆を導き、力づけているのに対し、日本の政治家の語

りの弱さが指摘され、それがコミュニケーション文化の違いのように受け入れられてしまっているように思われる。しかし、本セミナーでは「日本文化論」で片づけたくはない。

というのは、「日本文化論」には、「ヨーロッパ」が普遍であるという前提のもと[10]、日本の特殊性を論ずる、という側面があるからである[11]。つまり、明治以降、日本の学術の本流であったヨーロッパ起源の歴史学では、常に「ヨーロッパ」が普遍であると考え、日本人もそれを鏡として自分たちを見て、自分たちは例外であると言ってきたという背景がある[12]。それを崩していかないと歴史学は発展できないと思うからである。

最初に立ち戻ると、我々は日本人であってもなくても、一人の人間として自由に次の一歩を選べるはずである。

自分自身を振り返っても、語れるとき、語れないとき、語りたいとき、語りたくないとき、などいろいろとある。「語る」力は、本来誰にでもあるものだろうが、語るかどうかは我々自身に委ねられており、その判断にはさまざまな要素が関連する。あるいは、「語らない」を「黙る」「待つ」「様子を見る」「考える」「信じる」「聴く」など、能動的な行動として理解することもできるだろう。

どのようなとき、政治家は、「語らない」ことを選択するのだろうか？　語らなくても政治家たりうるなら、なぜ有権者は、「語らない」人に投票したのか？別の方法で癒してくれたからなのか、それとも与えてくれたからなのか、語らなくても守ってくれると信じているからか、投票しないと守ってやらないぞと脅されたからなのか、それとも単に様子を見ていただけなのか？　そして、「語る」は本当に権力をつくるのだろうか？　私は、むしろ黙るほうが権力をつくるのではないかなと思うこともある。

討論には、フロアーからの積極的なご参加を期待したい。

10　ここでいう「ヨーロッパ」は地理区分としてのヨーロッパではなく、概念としての「ヨーロッパ」である（羽田正『新しい世界史へ―地球市民のための構想―』〈岩波新書、2011 年〉85 ～ 89 頁、セバスティアン・コンラート、小田原琳訳（『グローバル・ヒストリー――批判的歴史叙述のために―』〈岩波書店、2021 年〉168 ～ 169 頁）。「概念としてのヨーロッパ」についての私の意見は、前掲拙稿「普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー」（とくに 1 ）。

11　そのため、「日本文化」と呼ばれているものが、本当に日本独自のものなのか、スリランカやポーランドにはないものなのか、自分たちが「普遍」だと考えるものが地理区分としてのヨーロッパに存在したのか、などについては、かならずしも実証されていない。実際には、「地理区分としてのヨーロッパ」は一枚岩ではないし、「日本」も一枚岩ではない。

12　日本に限らず、他の非ヨーロッパ地域でも起きている（コンラート前掲書、163 ～ 169 頁などを参照）。